

本部かわら版

発行責任者
神奈川県隊友会
事務局 久保内修一



会務報告

県隊友会事務局

- 一 本年9月発行のかわら版(49号)以降、県隊友会としては次のような事業を実施しました。
 - ・ 関東甲信越静ブロック研修会 横須賀地区(10月5・6日)
 - (詳細は神奈川県隊友会ホームページ参照)
 - ・ ビッグレスキユウ神奈川(10月15日)
 - ・ 大井町末病バレーピオトピア
 - ・ 神奈川県殉職自衛官追悼式(11月16日 陸上自衛隊武山駐屯地)
 - ・ 第3四半期県理事役会(12月9日) 神奈川地方協力本部
- 二 今後の行事予定
 - ・ 第一空挺団訓練始め研修(1月7日)
 - ・ 防衛諸団体合同賀詞交歓会(1月8日) かながわ労働プラザ
 - ・ 県隊友会防災図上訓練(2月3日)
 - ・ 4/四半期県理事役会(2月23日)
 - ・ 第2回安全防災部会(3月2日)
 - ・ かながわ自衛隊音楽まつり(3月3日) 神奈川県民ホール
 - ・ 海岸線を有する横須賀警備区自治体等との防災連絡会議への参加(3月5日)

老兵は消え去るのみか



県隊友会会長 松岡 貞義

海上自衛隊を退官して十三年が過ぎた。現役当時、諸行事等で来訪された先輩OBから後日招待のお礼とともに助言、時には苦言を頂戴することがあり、納得して受け入れられる助言は次回の行事等に反映させるように努めてきた。そうした経験もあり、退官後は現役後輩とは「問われれば応えるが、それ以外は無用な口出しはしない」姿勢で接していた。しかし、その後、何度か部隊主催の行事に参列した際に部外者の接遇や式典の進め方などについて疑問に感じることもあり、先輩として後輩に申し継いだと思っていたことが、うまく伝わっていないことを反省するようになった。それ以降、疎まれることを承知の上で、終了後に部隊指揮官等に対して手紙や電話で招待に対するお礼に付言して、それとなく所見を伝えるようにしてきた。また、現役後輩からもお礼の返事を頂くことがあり、自分なりに組織の先輩・後輩の良き繋がりを感じていた。

そのように過ごして数年を経た頃、内館牧子著の「終わった人」を読み、それまでの自分の振る舞いについて考えさせられた。自分としては組織としての良き伝統や文化を継承して欲しいとの思いから発した助言ではあったが、後輩からすれば、「先輩余計なお世話ですよ、もうお引き



取りください」と見られていたのではと自省するとともに、妙な寂しさを覚えた。

三年余りに及んだコロナ禍もようやく落ち着き、数年振りに部隊主催の行事等に参列すると何か違和感を感じることがある。コロナ禍のため部隊主催の行事が中止や規模縮小を余儀なくされた結果、行事を担当する関係者に行事執行のノウハウが継承されていないのではと危惧している。同席した民間の招待者の人からも同様の疑問を伺うことがあり、その都度、コンプライアンス重視や隊員の業務量削減など現状の自衛隊を取り巻く環境の変化が諸行事に及ぼす影響などについて説明し、理解を求めている。

戦後、連合国軍最高司令官として絶対的権力を持って日本を占領統治したマッカーサー将軍が帰国後に米国議会において演説した「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」は老兵の矜持を示した有名な言葉である。それでも退官後にお節介を焼く老兵がいても良いのではないかと思う。いずれは皆消え去るのだから。

ちなみに、マッカーサー将軍は、朝鮮戦争での戦局の打開を図るため、北朝鮮や中国内部への核兵器の使用を主張して当時のトルーマン米大統領に解任されたのだが、彼はこの演説において、第二次世界大戦で日本が戦ったのは自衛のためであったと述べ、更には次のような日本人を礼賛する発言を残していること

が、現代の日本人にあまり知られていないのは残念なことである。「私は日本国民ほど清らかで穏やかで、秩序正しく且つ勤勉な国民を他に知らない。また将来人類進歩のための建設的任務におい



て日本国民以上に高度の希望を寄せ得る国民を他に知らない」。

今後老老の身であることを自覚しながらも民間との「かけはし」に心掛け、現役隊員とは適度な距離感を保ちながら側面からのサポートに努めたいと思うこの頃である。

(本投稿は、「隊友」十月号に掲載された筆者の投稿文を一部加筆したものです。)



地球温暖化を止めねば!! (その1)

県本部相談役 寺地 重告



「地球温暖化とその弊害」この言葉を目にして久しい。南極や北極の水が溶け出し・海面上昇で沈み(消滅し)かけている島国も有れば、赤道付近のアフリカ諸国の

ように長年の異常な雨不足・干ばつで草原や農地が砂漠化し食料不足による民族紛争や気候難民が生起している国々もあるほか、異常気象による豪雨・洪水・熱波・猛暑など自然災害の頻発及び農産物の不作、海水温度の上昇による魚貝類の不漁又は死滅など、その弊害の例を挙げればきりがない。今や、地球温暖化を止めることは人類の喫緊の課題であり、公表されている文献資料を引用しつつ、我が故郷の自然への影響なども紹介しながら、その原因・現状・対策について、二回に分けて考察してみたい。

一 地球温暖化の原因・仕組み

地球温暖化の原因は、図1のとおり、人間活動の拡大による温室効果ガス(二酸化炭素(全体の76%、メタン)16%、その他

(80%)の増加により地球表面の温度が上昇するためとされている。

これは、図2のとおり、十八世紀イギリスに始

まった産業革命以降、鉄鋼・造船・鉄道・自動車・航空機産業などの発展とともに、地球温暖化の原因となる二酸化炭素などを大量に発生する石炭や石油・天然ガス等の化石燃料を大量に消費し、一般家庭において

も、人々が生活の豊かさ・快適さを求めて車に加え、熱・二酸化炭素などを発生する調理器具・冷暖房機具などが普及した。また、大気中の二酸化炭素を吸収・貯蔵する森林が世界各地で伐採・焼畑農業・山火事などで喪失・縮小しているのも一因である。

世界の二酸化炭素排出量は、図3のとおり、産業革命以降、急激に増加し、五十年前に比べて約四倍、百年前に比べて約十二倍と、現在も増加の一途をたどっている。IPCC(気候変動に関する政府間パネル)評価

報告書(2021)によると、温室効果ガス排出量の急激な増加に伴い世界の平均気温は、図4のとおり、1850年を境に急上昇し、以前に

比し1880~2012年の間に0.85℃、2011~2020年の

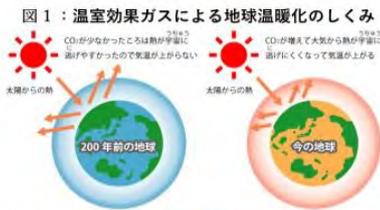


図2：化石燃料使用・CO2排出の例

世界の石油・石炭などの二酸化炭素排出量の推移

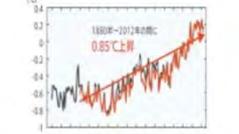
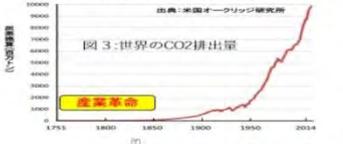


図4：世界の平均気温の推移

間で1.09℃上昇、このままだと、今世紀末までに3.3~5.7℃の温度上昇が予測されている。

一 我が故郷の自然への影響・海は死んだ

私は国道3号線沿いの東シナ海に面した風光明媚で自然豊かな鹿児島県阿久根市大川で育った。地球温暖化の影響を昭和二十年頃と現代と比較すると、①冬には雪が三〇センチ位積もっていたが今や積もらない、②4月初め入学式の頃に咲いていた桜が三月中旬頃には咲くなど花の開花時期や農作物の生育が約二週間早い、③ミツバチが少なくなりカボチャなどは人工授粉に頼る農家もある、④メジロ、ツバメなどの渡り鳥が少なくなった、⑤地域を流れる川は自然豊かな清流でメダカ、川エビ、はや、アユ、つがね(モズクガニ)、ウナギなどが沢山生息していたが、高度成長期が終わりかけた昭和四十五年頃から公共工事の名の下、川の護岸を徐々にコンクリート化(セメント製造過程で多くの二酸化炭素を排出する)したことに加え、水田の耕作放棄地拡大などで川の水量が減ったことも相まって、生息環境を破壊されたメダカは全く姿を消し、アユ、つがね、ウナギなども生息数が激減した。

海は東シナ海に面した荒磯(写真下・右は北方、左は南方を望む)で、子供の頃は魚貝類も豊富で海水浴ついでに力

二、サザエ、タコなども良く採れたし、素人でも魚が良く釣れたものである。ところが、海水温度が徐々に上昇するにつれ、昭和四十年頃から岩ノリ、ヒジキ、ワカメ等



の海藻類などが次第に育ちにくくなり、海藻類を住家とする小エビや小魚類が減少、食の連鎖反応で、海藻類・小エビ・小魚類を餌とするカニ、アワビ、サザエ、伊勢海老、タコやアジ、カサゴ、メジナ、クログダイなども段々取れなくなった。

これに拍車をかけたのが昭和五十九年七月に運転を開始した川内原発（下写真右上）の原子炉冷却排水である。高温の原子炉冷却排水は黒潮に乗って阿久根方面に流れ、海水温度の上昇で瀕死の磯焼け状態にあった磯を、更に岩が白くなって海藻類が全く育たない磯（白石化）に変質させ、我が故郷の海からはアワビ、サザエ、伊勢海老、タコなどは殆どいなくなり、磯釣りしても魚も殆ど釣れない不漁の海となった。



（以下次号・その2 地球温暖化を止めよう）



全国四十七都道府県を

県本部顧問 濱野 靖



私の三十余年の陸上自衛官時代、全国規模の異動・転勤は当たり前だったから、次第に末踏の土地を訪れることが楽しみとなり、いつしか全国四十七都道府県を訪れ、その地に足跡を残すことを目標にするようになった。その条件は、都道府県内の大地に足を踏み込み、足跡

を残すことで、列車で単に通過した場合はカウントしないこととした。

現役間の転勤、出張、演習、災害派遣、旅行等で四十七都道府県の大部分に足を踏み込むことができたが、訪れる都道府県は限られていた。北海道は初めての勤務地でもあり、その後の勤務や出張等でたびたび訪れる機会があった。また、当時老妻も札幌で働いていたことから、思い出深い土地ともいえる。

一方、四国地方の一部等は訪れるチャンスもなく、結局退官まで残り五県、西から宮崎、高知、徳島、鳥取、和歌山県は未踏の地となった。

退官後、防災の仕事で全国の河川の洪水対応の防災演習または個人的な旅行により、二〇一二年、退官後十六年目、徳島県を最後に四十七都道府県の地を旅し、その地に足を下すことができた。皆さんは如何でしょうか。（陸 金沢区在住）



遅しさを失っていく日本人

県本部監事役 寺田信夫



一 最近、街中で空き家の撤去で働いている人を見ると半分位は外国人です。この間、金沢区の共済病院の近くでは見た時は、3人全員が外国

人でした。古家を撤去した後、道路に散らかったゴミを清掃していた青年は、通過する私に通行上の注意事項をたどたどしい日本語で私に述べました。

何時ころから、古家・建物の撤去等の現場から日本の若者が消え、外国人の方が多くなったのか？

恐らく日本人を募集しても集まらないのでやむを得ず外国人になってしまったのでしよう。大半は建築会社が採用した技能実習員、あるいは他の領域の技能実習員が取り敢えず収入の多い工事現場に流れてきていると考えられます。手取り早く現金を稼げる場所だと思えますが、「3K」と呼ばれる仕事

は日本人には敬遠されます。普通の青年には、常日頃、見慣れている飲食店のアルバイトが身近で、短時間の勤務が可能なためだと考えられます。私的には、日本人が建てた過去の建物を日本人の若者が解体することにより、その当時の材質・経済状態を理解し、先代人の知恵と創意工夫等を学べる良い機会であったと考えます。



外国人労働者

私の古家解体の経験

昭和50年代の初頭、陸自の札幌駐屯の通信部隊で小隊長勤務の頃、駐屯地近傍の木造平屋の官舎を1個小隊で10個程度撤去したことがあります。今考えれば、自衛官がなぜそんなことをするのかと思われるでしょう。考えられるのは、4階建ての新しい官舎の建設を急ぎたい業務隊から予算が足りない、古い官舎の撤去を

駐屯地の主力部隊である通信群が依頼され、周りに回って私の所属部隊が担当することになったのだと思います。

陸上自衛隊の特性から、経験豊かな先任の1等陸曹が話し合い、リヤカー、ロープ、木製と鉄製のハンマー、山鋸、梯子等が準備され、①屋根のトタンの除去、②壁のモルタルの除去、③主たる木柱を残し、半分ずつハンマーで柱をずらし傾け、最後は、ロープで引き倒しました。

③最後に、コンクリートの土台をハンマーで砕いた記憶があります。これが陸軍の伝統を一部受け継ぐ陸上自衛隊の自己完結作業であり、足りないかと嘆くのではなく、こんなことは自分たちの任務ではない、なんでこんなことするのかと文句を言わず、足りない物はどこから借りて来て、何とかするのです。今、ウクライナ軍の中の創意工夫に自己完結の努力をみる事ができます。

三 日本人の見上げた任務意識（JRのトイレ清掃）

十月中旬、午後3時頃、大船駅でトイレに行った際、40〜50代の男性が制服を着て小便器の中を磨いているのです。もちろんゴム手袋は装着しています。しかし、中をしつかりと磨き上げているのです。私も自宅の台所、風呂場、洗面所、便所等を毎週清掃しますが、便器の中に手をつ込んで清掃したことはありません。多くの人が使用する便器に手をつ込んで綺麗にしているのです。頭が下がります。最近何かとモラルの低下に腹が立つことが多い中で日本人として誇りに思います。どう言う教育をされているか素晴らしい。

最近のテレビのニュース等で溢れている食傷気味の言葉

① 第一に各種のハラズメントが飛び交っている

「パワハラ」、「モラハラ」、「セクハラ」、「カスハラ」、「マタハラ」等

② 第二に性に関する言葉です。「ジャーニーズの性加害」「自らの性認識」「性転換」「バイセクシャル」「同性婚」「性転換時の法律（手術の必要性）」等

③ 第三に人口減少、特に働き手である若者の減少に伴う働き方改革（医師、運転手、先生等の過重労働問題）

これらの事に問題があるのは事実で、法律の整備も必要です。しかし、多種多様な人と価値感が異なる人が存在する中で、多くの人が満足する規則を整備するのは無理があります。人間、日本人としての原則的事項を規則に取り込み、次々と起こる困難な事項に対しては、原則的規則に照らし、回りの人と協力し、克服していく遅い日本人を養成して行くべきだと考えます。



沖縄体験記

県本部事務局長 久保内 修



今年7月に神奈川県隊友会事務局長に就任しました久保内修一です。出身地は愛媛県松山市道後温泉です。防衛大学校は26期で航空工学を専攻し、海上自衛隊ではP-3Cの戦術航空士とし勤務しました。

今回は、唯一の沖縄勤務時のお話をしたいと思います。平成20年12月10日、初めて沖縄の勤務となりました。

以前、沖縄勤務の内示を受けた私は白の夏制服を新調し心を躍らせていましたが、発令の三週間前に厚木勤務となりました。当時、航空集団司令官でした赤星海将に呼び出され、「久保内よ、沖縄勤務は心身ともに品行方正な人間しかできないんだよ。暫くは、俺の目の届くところで修業せよ。」と言われました。平成20年3月赤星海将が海上幕僚長にご就任された同じ年に那覇勤務となった私は、これで心身ともに品行方正な人間だと海幕長に認められたのだと胸を躍らせながら単身赴任先の那覇行きの間機に乗り込みました。しかしながら、那覇空港に降り立った私は震えていました。

12月の那覇市の平均気温は19.0度です（東京の平均気温は7.7度。そのため、夏用の背広を着た私は、薄暗い空と強い風で思わず寒さに震えていたのです。

後で知りましたが、沖縄の冬は第二の梅雨と呼ばれ（12月の那覇市の降水量は110ミリ。東京の降水量は57.9ミリ）、雨及び風が強い日が多いのです。そのため、気温の割には体感温度が低く感じられます。

家族への第一報は、「直ぐに冬用の背広を送ってくれ。」でした。着任の翌日から、地元の関係者へのあいさつ回りが始まりました。

初の沖縄勤務、高揚感に溢れる私の意に反して地元の人たちの言葉は海上自衛隊への苦情ばかりでした。問題は、翌年2月1日に来沖する練習艦隊の那覇新港への入港でした。

沖縄へ赴任する前、海上幕僚監部で「練習艦隊の那覇新港への入港に関して中央は認めていない。」



那覇空港

と聞いていましたが、すぐさま海上幕僚監部に対して地元との関係を悪化させないことを理由に練習艦隊の那覇新港への入港調整開始の許可を取りました。しかし、内心では年末年始の休暇期間を考慮すると今から調整しても那覇新港への入港は難しいと考えていました。

初めての沖縄勤務で右も左も分らない私でしたが、当時運用幕僚であった江藤君、監理幕僚であった門野1佐、沖縄防衛局の伊藤さん及び沖縄地方連絡本部の依田さんなどの援助を得て各所と調整を開始しました。

12月26日に海上幕僚監部より練習艦隊の那覇新港への入港許可を、入港2週間前に沖縄県港湾局から入港許可を得ることができました。練習艦隊の那覇新港への入港は、瓢箪から駒が出た感じでした。

練習艦隊の那覇新港入港に関しての幾つかの思い出があります。

入港歓迎行事において自衛艦旗を掲揚した練習艦「かしま」が接岸する前、式典に参加されていた当時沖縄防衛協会会長で株式会社國場組会長であった国場幸一郎氏が目に涙を浮かべられていました。また、入港調整の段階において練習艦隊の総員名簿や10分ごとの行動計画の提出等の要求や入港行事実施中の車両の走行及び入港反対デモ等がありました。

私は沖縄へ行く前はかなりの人が反自衛隊と聞いていましたが、本当に反自衛隊の人たちは1割ぐらいで殆どの人は自衛隊に悪い感情は持っていません。このことは今も私の中では変わっていません。



那覇港

沖縄での勤務ですが、当時の沖縄でも沢山の事象が生じ久保内2尉、1尉当時考えていたことを実践する機会を得たことは私の中で有り難い経験となりました。その中で、平成22年9月7日に尖閣諸島中国漁船衝突事件が生じました。

当時の私は、東シナ海の状況図を見ながら中国の対応の早さに感心したことを覚えています。

初の沖縄勤務で沖縄の歴史・文化等を知ることができました。地元の人から沖縄方言(ウチナーグチ)を学んだらと助言され、那覇市牧志にある桜坂劇場の方言講座を申し込みました。

この講座は、NHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」でおばあ役をされた平良とみ氏が主宰されていました。実際に平良とみ氏を見

たのは一度だけで、他は夫の平良進氏が講師をされていました。この講座に初めて参加した際に、何故この講座を選んだかを話す機会がありました。私の次に話し出した人の話が思い出されます。

彼は、話の内容から私の一歳下(昭和35年生まれ)と思われる(昭和35年生まれ)と思われま

す。また、那覇市の首里に幼少の頃より住んでいました。彼の話によると、中学までのクラスが「旧土族」と「平民」と別れていたため、平民の方言は理解できるが、旧土族の方言(首里方言)は理解できないので講座を申し込んだとのことでした。

沖縄方言に王族等の旧土族間で使われていた言葉があることより、アメリカの統治時代を踏まえても首里付近では、旧土族と平民との差が存在していた事実には驚きました。

私の一年間の成果は、残念ながらウチナーグチで「涙そうそう」を歌えるだけで終わりました。沖縄の方言の次に歴史を学びました。



平良 とみ氏

その過程で旧王族の一族の方を知る機会がありました。私はその方に「琉球料理は何だと思えますか。」と質問され、「チャンプル」と答えました。その方は、一言「それは平民の料理です。」と答えられました。私は、「琉球王朝の料理は何ですか。」と尋ねました。その方に見せられたレシピの内容は、朝からウナギのかば焼きを食べるなど殆ど日本食に近いものでした。

私は心の中で、世界には宮廷料理は数あるが琉球宮廷料理が無い理由が理解できた気がしました。私の沖縄勤務中、興南高校の高校野球春夏連覇がありました。

那覇市内では大騒ぎでしたが、知り合いの「これで沖縄の戦後は終わった。」という言葉が胸に刺さりました。その方の父上は、常々「夏の高校野球甲子園大会で沖縄県勢が優勝しないことには沖縄の戦後は終わらない。」と語っていたそうです。

それぞれの方の沖縄の本土復帰に対する思いを知る機会となりました。

私の沖縄勤務は二年で終わりました。今でも当時の方々と連絡を取り合っています。楽しい思い出であるとともに沢山のことを学び実践する機会を得たと感謝しています。今でも機会があれば沖縄へ帰りたと思っています





機関科調理員の話 (護衛艦おおい)

西湘支部会員 廣井 淳



現在は給養員という職名の、艦内や部隊で食事を作っている隊員を50年前は調理員と呼んでいました。

昭和45年11月21日、青森県むつ市の大湊の土曜の午

後、私は上陸番ではないので艦内において洗濯、読書等していました。

私は17歳から日記をつけていて割と正確に過去の出来事がわかります。

当日の記録↓「大掃除、〇〇が家に帰るといので交代。停当(停泊当直海士)四直、一時半に防火訓練が行われた。夕飯のキスのフライを揚げる。やさしそうで案外難しかった。」

この日は休日特有の緩い空気が漂っていました。一時半に防火訓練が行われているので少しはピリツとしていた?

停当というのは機関科から1名づつ7時45分から翌朝7時45分迄使いっ走りをする当番です。

休養日にこれに当たるとまるで平日と一緒です。この頃は母港にいても沖のフイ(浮標)につないでいたので陸とは小さなボートで連絡し、電気は艦内の発電機で賄っていました。文中に出てくる4直とはこの発電機当直のことで20時〜24時、6時〜8時の勤務で停当は朝早い。ろまとめたりするものがあるので4直に入ります。

ご覧のように休日という雰囲気ではないです。当時は学校も職場も土曜の午前は通常通りで午後から休みでした。今も私立の学校でそんなことをしています。

午後、時間がはっきりしませんが私は上甲板からふたつ下の居住区(部屋のこと)にいました。

食堂へ続く、上へ行くハッチから補給科のF君がおりてきて「おーい。あっちゃん手伝ってくれや」と言うので調理室へ行きました。私は古い人も含めて「あっちゃん」と呼ばれていました。今も当時の人にはそう呼ばれています。F君は乗艦が一週間違いの横須賀教育隊出身の人でした。私は舞鶴教育隊なのでそれほど親しくはないのにおかしなものです。

さて、休養日は乗員の三分の一が残っていました。イザ緊急出港・・・という時三分の一いればなんとかなる準備ができ、機関やリーダーの立ち上げて2〜3時間かかるのでその間緊急呼集で上陸員を呼び戻して態勢を整える訳です。

この日も五十数名残っていました。この人数だと担当の調理員は一人です。調理室へ行くとF君が「フライを揚げてくれ・・・」と長方形のパン粉

がついたものをフライヤーに入れてちょうどキツネ色になるくらいで引き上げて「このくらいの色になるまで」と実演して教えてくれました。日記によるとキスのフライを50何ヶ、少しずつ油の温度が下がらないよう、また黒焦げにならないよう気をつけながら揚げました。F君は別の作業にかかっていたので、長時間揚げ物をしていたので油に酔い食欲がなくなりました。このフライヤーは電気を使っています。艦艇は弾が当たった時火災になる恐れがあるので直火は使え



キスのフライ

ません。ご飯も大きな蒸気釜炊いています。(創設時のアメリカ貸与の艦にはオイルバーナーがあったと聞きましたが資料がないので不明です。)

同時にF君はご飯を炊いてみそ汁を作った他のおかずも作っていました。

翌朝もひとりで準備です。艦内には航海とか大砲とか機関とかさまざまな職種がありどれも重要ですが給養員は一、二を争う大変な職種と思われれます。感が揺れている時にみんなの食事を作るのはたまらないでしょう。

おいしくて当たり前、ご飯がちょっと変だと文句を言われる。家庭も含めて食事を作ってくれる人には感謝したいものです。ちなみにこの日キスのフライについての苦情はありませんでした。(当時私は機関科ディーゼル員見習いでした。)

「西湘支部だより」

新入会員 小松原 心悟(陸)

(札幌から転入・足柄下郡箱根町)

ようこそ西湘支部へ宜しくお願いします。

編集後記

令和5年もあと半月となりました。内外暗いニュースの中、今期の大谷選手の大活躍、そしてドジャースとの歴史的契約は世界を驚愕させる明るい事象でしょう。大谷で始まり大谷で終わる一年でした。

皆様のご協力により無事かわら版50号を発刊することが出来ました。ご投稿いただいた皆様に感謝申し上げます。

皆さま、よいお年をお迎えください。

編集子



護衛艦 おおい